

ねらい

5歳児：自分の思いを伝え合う。共通の目的に向かって遊びを進める。

1年生：幼稚園の友達と楽しむために、遊びやルールの工夫を考えたもので遊び、遊びやルールが楽しめるものだったかを考える。

本時のポイント

★ 環境構成
♥ 援助

★教材は幼稚園からの持ち込みだけではなく、1年生と共有できる新しく大きな段ボールも出す。
⇒環境の再構成・見直し

★子どもたちが納得できるまで遊べるような時間の余裕をもつ。⇒時間の保障

♥自分の思いを押し出す園児①には幼稚園の保育者が主に関わり、同じピタゴラグループの意思表示が得意ではない小学生A児・B児が力を発揮できるように考える。園児②には自分のめあてや目的に向かえるよう関わる。⇒個へのねらいの共有・援助の工夫・ねらいの明確化

実践内容

それぞれのグループが、より楽しめる「秋のお宝」をつくり、完成させ、お客さんになって遊び、その後、自分たちで振り返りをするという流れで進めた。

・継続することで、それぞれのグループに幼小の担任が個別にねらいをもって関わる事が可能に!

<子どもの姿より>ピタゴラグループ(園児①・②、1年生A児・B児)

- ・ガムテープを切って「あと何枚?」「どれくらいの長さ?」と自ら発言するA児。
A児の姿が意欲的で誰かのために何かをすることの意義を感じているように見え、成長を感じる。
- ・幼稚園の保育者がじっくりと関わることで、控えめなB児が最後まで自分のやりたい遊びをやりきることができ、達成感を味わうことができた。
- ・園児①も②も「コースをつくってお客さんに来てもらう」という意識をもつことができていた。
- ・振り返りの場面で、B児は「自分たちがつくったゲームにたくさんお客さんが来てくれて良かった」という発表をした。B児を見る同じグループの子どもたちの視線からも「仲間」としての一体感や聞こうとする態度が伺えた。
- ・どちらの校種の子どもたちも、幼稚園の保育者にも小学校の先生にも話をし、信頼できるようになっている。今までの積み重ねの成果だと言える。

あと何枚?
どれくらいの長さ?



たくさんのお客さんが
きてくれてよかった



■交流活動後の話し合いより

- ・A児が誰かのために何かをして、友達と協力している姿が見られたことに成長を感じた(小の担任)。
- ・全体を通して、前回よりも緊張感が無く遊ぶことができていた。時間の余裕もあり、それぞれが満足いくまで遊ぶことができた。交流の積み重ねの意義を感じた。
- ・B児が最後まで自分のコーナーをやり遂げられて良かった。新しいコースも増設したことと、幼稚園の保育者が間に入って役割を見つけられるように言葉をかけたりしたことで、最初は遠慮がちだったA・B児もだんだん意見を出したり、自分ができることを見つけて主体的に動くように変化していった。
- ・グループの4人それぞれが自分の目的に向かうのではなく「共通の目的」に向かえたことが良かった。

交流を振り返って

- ・いつもは自分!自分!の子どもに「待つ・見守る」という姿勢(1年生)が見られ、年下の園児が一緒だからこそできる経験だった。
- ・相手意識をもつ、いろいろな人と関わる楽しさや面白さ、難しさを味わう経験ができた。
- ・深い対話につながる基礎になるコミュニケーション能力の土台が子どもの姿から見えた。
(相手の表情を見る・気持ちを想像する・思いを汲み取る・譲歩する・気持ちを調整するなど)

教師の学び

- ・子どもが安心安定してこそ、幼小どちらの教員が関わっても自分の思いが出せる。
- ・互いの教師の持ち味を生かす授業・保育ができた。
- ・前回の合同授業の反省を生かし、双方で話し合い、授業を再構築(環境の再構成)できたことが連携の意義。
- ・個の理解、個への願いが子どもの夢中を引き出す第一歩であり、個別最適な学びを意識し、意欲をいかに引き出し、継続させていくかをともに考えたい。

次への課題

- ・連携の意義をどうやって学校全体に広げていくか。
- ・幼小共に、少人数で交流がしやすい、一校一園だからこそこの交流の一事例である。
そういう地域や規模の幼小のモデルとなるよう、今後も交流・連携・接続のあり方を探っていきたい。